

1. 幼児・児童における未来型能力	必要な能力	音楽・美術教育に対する不快感の解消(未来の幼稚園教諭、保育者となるべき学生が、主体的に表現することを恐れず、また他者の表現に対して開かれた態度と価値観を以て接する能力の育成)		
	なぜ未来型能力か？	子どもたちの豊かな表現を育む指導者を養成するに当たって表現に対するためらいや忌避感といった構え・態度を克服することが第一に必要。		
	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)			
2. 幼児・児童における未来型能力の育成	育成方法の提案	表現指導者育成の「場」と、子どもの表現の「場」は、きわめて相互に関係しており、双方に一貫した価値観や思想を以て構成されることが必要不可欠。特に、表現指導者育成の「場」の構築の仕方は、子どもの表現の「場」の質を決定づける可能性がある得る。		
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)			
3. 未来型能力を指導できる指導者育成	現状の把握 (調査・実験などの結果)	<p>指導者育成課程在学中の学生の美術教育に対する意識を記述内容を分析。</p> <p>&lt;結果&gt; :多くの学生が様々な理由で美術教育に対する不快感をもっていた。 学生の美術教育に対する不快感と言うよりも美術教育に対する嫌悪感や挫折感などが相対的に根深い→「A6 いい思い出がない」「A7 辛い思い出」 →「上手・下手」などの他者評価を意識しすぎることによるプレッシャー、またそれと関係して劣等感・苦手意識を誘発する。 →一定の表現内容や方法を押し付けられてきたといった指導の問題から自己の自発性・主体性を認められてこなかったということへの不満 →教科自体に学びがいややりがいい・教科の意味や価値を見出すことができないで「つまらない教科」「おまけの教科」という意識が定着</p>	<p>指導者育成課程在学中の学生の音楽表現の不快感・受傷体験に関する記述を分類。</p> <p>→羞恥心・不安、指導者・教師への恐怖心、否定的体験、自己否定、挫折体験の5つの観点に分類。</p> <p>結果: 生来「音楽」が嫌いである人はごく稀であるものの、習う音楽を嫌い、苦手意識を持つ人は一定数確実に存在。 →音楽は公教育・私教育どちらの場合においても指導者が、学ぶ者の心と音楽の関係を尊重せず、知識や技能に指導が偏重していることが原因。</p>	
	育成方法の提案・実施	<p>「子ども美術」の授業の実施。 造形・表現を楽しみ、それと共に周囲の仲間や教師と共に互いの表現を高めたり、その楽しさを広げたりすることを重視。</p> <p>⇒従来の美術教育:教師側が個性や独創性を求めるために「ほかの人の作品を見てはいけない」「真似してはいけない」「個々に作品の質を上げなければいけない」と指示し指導。造形・表現活動そのものの楽しさや価値に触れられず、不快感ばかりが募ってしまっていた</p>	<p>「子ども音楽」「音楽表現指導法」の授業の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「不快感・受傷体験からの回復」、「自然な表現の場の構成」を授業の軸として設定し、音楽表現活動を展開</li> <li>・以下の3つのルールを明確化。             <ul style="list-style-type: none"> <li>i) 他者の表現について、上手・下手といった「評価」を一切口にしないこと。</li> <li>ii) 「子どものために」という観点を常に持ち続けること。</li> <li>iii) 学習者が主体的に行う表現活動の際、指示・教示で「～して下さい」と言わないこと。</li> </ul> </li> </ul> <p>「子ども音楽」:指導者役が子どもたちの音楽的成長に必要であると考え、準備した題材を各グループそれぞれ30分間で実践的に展開。 「音楽表現指導法」:指導者役のグループに対して、幼稚園・保育園の表現活動で使われることのできる多くの題材を事前に提示。</p>	<p>本学が策定した「汎用的学士力」について、実際の幼稚園現場ではどの程度必要または重要となるのか、公立幼稚園長・担任教諭それぞれに5点満点で評価を求める調査を実施。</p> <p>結果一園長では【創造力】が最も低い評価点となっているのに対し、担任教諭は【課題解決力】や【受容性】よりも【創造力】を高く評価し重要視している。担任教諭は自分自身の保育を工夫するためにも、子どもの感性や創造力を育むためにも、現場教師には【創造力】が不可欠だとしている。</p>
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	<p>授業後の振り返り記述で大きな変容→「F 教科の価値・役割の再評価」「G 造形の楽しさ再確認」「H 造形の価値の実感…イメージ」「I 材料の色・形、技法」「J 造形の価値の実感…個性・自由」「K 造形の価値の実感…共創・人間関係」「L 鑑賞の価値・楽しさにふれた喜び」「M 内なる子どもへの気付き」という8つの観点に学生の変容を分類。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・美術教育の楽しさや価値を実感し、教科そのものの役割・重要性を改めて認識</li> <li>・コミュニケーション能力を培う教科特性、共創する楽しさに目が向けられた記述が多い</li> </ul> <p>→授業前の段階では、全くこのような意識を持ってはいなかったため、とりわけ大きな変化として認められる。</p>	<p>授業映像の記録の分析:</p> <p>&lt;授業開始当初&gt; ・多くの学生が、授業開始当初は、指導者役グループ、子ども役グループともに、音楽の「場」において「自分を守る」という態度からスタート</p> <p>→一定着した音楽の不快感、根深い受傷体験から、人前で音楽を表現することに、指導者役、子ども役を問わず、萎縮し、羞恥心を持ち、警戒している様子</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽表現における一人称としての体験の「場」は構成されず、「役割」で彼我を分断する構造がみられる。</li> <li>・活動中の言葉かけでも「～してください」という表現を多用、空間の利用法においても指導者と子どもの間に広大なスペースが生じており、この距離感が体験の一体感を阻害</li> </ul> <p>&lt;中盤頃&gt; ・「～してください」という表現は減少する ・「自らが準備してきた題材を一緒に楽しもうと子どもを誘うように変化」 ・指導者と子どもそれぞれの間に存在していた広大な空白領域は減少し、指導者と子どもそれぞれの役割の者が、非常に接近してくるように変化</p> <p>→先生役はまだ緊張がとれないが、子ども役の方がリラックスして表現し始め、先生役の方がむしろそれに反応する形で、音楽表現活動が促進されている様子</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・先生役の「取り繕った笑顔」と、子ども役の「自然な笑顔」が交錯しているように見える。</li> </ul> <p>&lt;後半&gt; ・「～してください」という表現はほとんど出現しない ・「自らが準備してきた題材を子どもと一緒に楽しむ」という一人称の関係がほぼ完成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者役学生の位置取りも、子ども役学生たちの中に混ざるような配置</li> <li>→空間利用は活動の内容に応じて臨機応変に無駄なく使われるようになってくる</li> <li>・先生役の学生も、子ども役の学生も「自然な笑顔」で楽しめるようになってきて、「音楽表現の場」において「自分を守る」という態度姿勢を示す学生の比率は大幅に減少</li> <li>→その場で生じている「こと」への自己の内的な関わりが中心になってきている</li> </ul>	